閃の軌跡～剣神～

灰色の剣神

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これはｉｆの物語

リィンがシュバルツァーではなく、あの剣士に拾われていたら

そして、士官学院入学前に鉄血の子の一人となっていたら

これは、Ⅶ組との友情の物語ではない

これは、リィン自身のための物語である

目次

プロローグ ―― 1
1話　剣仙と八葉 ―― 8
2話　別れと旅立ち ―― 12
4話　邂逅 ―― 24
5話　帝国へ ―― 35

プロローグ

「師匠・・・」

「フフ、まずちゃったか・・・」

黒髪の少年は、血どろみの中で倒れ、息も絶え絶えで今にも死んでしまいそうな桜髪の少女の身体を抱き上げた

その状態を見た少年は抱きしめる手に力が入る

「ちょっ、痛いよ、〝リィン〟

これでも重症なんだけど?」

「死傷の間違いでしょう」

「お、言うようになったねぇ・・・」

リィンは即答でそう返す

その返しにおかしそうに笑った

「貴女は死ぬ」

「うん、わかってる。

けど、君は生きる。
私の弟子であり子である君は生きる。」
「ええ、残党どもが残ってますが、あの程度なら
なんとか切る抜けられるでしょう・・・」
「フフ、本当に頼もしくなったなぁ・・・
師としてはうれしくもあり寂しくもあるなぁ
けど、悔いはない・・・
君に足を洗って真っ当に生きろなんて言わない
女神の元に行けるようになんてことも言わない
君は君の人生を歩むんだ・・・
さよならです、リィン・・・」
それを最後に桜髪の少女はゆっくりと目を閉じる
呼びかけてももう目を開けることはないだろうことは
まだ幼いリィンにも理解できた
幼いとはいえ、彼女とともに戦場を駆け抜けてきたのだから
「あ・・・あ・・・・あああああああああああ！」
彼女の死をトリガーにそれは発現する

黒かったリィンの髪色は白銀に、そして目は灼眼へと変える
そして闘気の質も禍々しいしく赤黒い闘気をその身に纏う
「・・・スベテヲコロシツクス
シャアアアアアアアアアアアアアアアア！」
そしてリィンは敵の群れへと突っ込んでいく
その戦い方は獣そのものだが、その太刀筋は〝彼女〟を連想させる
いくら理性がない獣へと変わろうと、培ってきた経験と太刀筋は長年〝彼女〟に師事されてきたのもあり、その太刀筋をしっかり継承している
「クソ、このガキ・・・！」
「ホロビヨ」
「ヒッ」
リィンは黒焔を纏ったその刀でその首を撥ねる
「・・・あのガキ、やりやがった」
「子供だからって多めに見てやれば」
「なめんじゃねぇぞ!!」
一人は殺られてやっと彼らは状況を理解する
それは油断していい、ただの子供ではないと・・・

あれは一つの軍隊を相手にできる獣であると・・・
「ハァァァァァァァ！
ヤキツクス」
リィンは刀に黒焔を纏わせ一人、また一人と確実に仕留めていく
武器などで防御を試みるが、リィンのそれは武器ごと焼き斬る
いくら防いだところで意味はない
かわすしか方法はないがそもそもの話、リィンの剣速もただの猟兵がかわせる代物ではなく、一人、また一人とリィンは斬り伏せていく
「なんだ・・・あのガキ・・・・」
「剣鬼・・・」
今のリィンの姿をみた誰かがそう言った
その名はこれを機に裏世界に名を轟かせることになるのだが、それはもう少し先の話
「ハァァァァァァァァァ・・・」
なんの変哲もないどこにでもいる子供・・・
それに猟兵たちは猟兵という一つの軍隊を半壊に陥られていた・・・
「ウォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ!!!」
リィンの闘気は更に禍々しさを増し、理性もなにもないただの獣へと着実に侵食され

ていた
人でなくなるのも時間の問題だろう
「あのガキ・・・
まだ、やるつもりなのか・・・」
「このままじゃ・・・」
その様子を見た猟兵たちが、リィンの様子を見て、戦慄する
リィン一人に隊を半壊させられ、更に闘気を練り上げ、こちらを仕留める気でいる
その証拠に灼眼に変化したリィンの目は猟兵たちを見据えている
上段に刀を構え、残りを仕留めようと練り上げた闘気を黒焔に変化させ、刀に纏わせる
「オワリダ」
「クッ・・・」
「やれやれ、おぬし等の自業自得とは言え、流石に無用な殺生・・・いや、無用ではないか
おぬし等はあやつにとって大切な人間を死に追いやった・・・
報いは受けるべきじゃが・・・理性のない鬼に殺されるのは、酷じゃろう・・・」
猟兵たちの前に現れたのは、腰に刀を携えた齢７０くらいの老人であった

リィンは、それに構うことなく、疾走し、刀を振るう
黒焔を纏った、その一閃は対象を焼き尽くす
しかし、老人はそれに臆することなく腰の刀に手を添え、腰溜めに構える
「シャアァァァァァアアアアアアア」
「筋は悪くない、剣武の才もあることながら
その太刀筋は己を高めてきたのじゃろう
その齢でこの武・・・
まだ伸びるじゃろうな
先が楽しみな子じゃわい
じゃが、今は眠るがよい」
老人は、一瞬の抜刀からの一撃でリィンを吹き飛ばし、意識を刈り取る
「ア・・・・」
意識をなくしたリィンは、白銀に染まっていた髪は黒に戻り、恐らくだが、灼眼に変化した目も戻っているところだろう
「お主こそ、儂の最後の弟子にふさわしい
結局はお主の選択次第じゃが、お主が七ノ・・・最後の弟子になってくれることを願うばかりじゃな・・・

こやつならあのじゃじゃ馬にも届きうるじゃろう・・・
〝八葉の後継〟となったばらばきっとお主は・・・」
そう言うと、老人はリインを片脇に抱え、歩いていくのだった
これがリインと剣仙と呼ばれる、武人の邂逅であった・・・

１話　剣仙と八葉

「ん・・・」
リィンが謎の老人に意識を刈り取られて数日後・・・
その老人に抱えられたリィンは、ようやく意識を覚醒させた
「ここは・・・」
「ふむ、目が覚めたか・・・
もう少し、時間がかかるかと思ったがそれは上々」
「・・・あなたは・・・」
リィンは、起き上がり、声のするほうへ顔を向ける
そこには、推定齢７０くらいの老人がいた
小柄でどこにでもいる普通の老人だが、服の上から見える鍛え抜かれた身体
そして、リィン自身が感じている、強者の気配
ただものではないだろうが、敵意は感じられないため、リィンは警戒を解く
「名乗っておこうかのう
ユン・カーファイじゃ

しがない老人じゃよ」

「御冗談を

〝ユン・カーファイ〟

武に精通する者ならその名を知らないものはいないでしょう

東方より伝わりし、八葉一刀流・・・

皆伝に至ったものは理に通ずる者とされ、〝剣聖〟の名で呼ばれる・・・

そして、その創設者たるが、〝剣仙〟ユン・カーファイ

あなただ・・

有名人を語る偽物の線もありますが、その隙のない佇まいと気配・・・

間違いなく本物でしょうね・・・」

〝八葉一刀流〟リインが言ったように、武に精通する者なら知らぬ者はいないとされる流派

東方に伝わるとされる太刀を使った剣術

そして、壱～悉の型まで存在し、その一つでも極めたものは〝剣聖〟の称号を与えられ、理に通ずる者としてその名を轟かせることになる

帝国にて武の双璧とされる、アルゼイド流、ヴァンダール流のように弟子がたくさんいるわけでもなく、知らぬものがいないとされるほど名の通っている流派であるわけで

もない
だが、八葉の剣士は少数でありながら、名の通った武人を輩出している
いわば、少数精鋭の流派
「フフ、まぁ、そうじゃな
お主を助けたのはたまたま通りかかっての
お主が暴走し、戦意のない猟兵を斬ろうとしてるところを止めたわけじゃ・・・」
「・・・そうですか・・・
ご迷惑をおかけしたみたいで・・・」
「なに、なんのことはない
それで、儂がお主を拾ったのはたまたま見かけたのもある・・・
じゃが、実際にお主を見て、確信した
お主、儂の弟子にならんか?」
「あの名高き〝八葉〟を師事してくださるのは光栄ですが、基礎だけとはいえ、剣術はひとつ修めてましてね
純粋な八葉の剣士とは言えませんけど?」
「なに、八葉も元々は多彩にある武の流派から取り入れ創設したものじゃ
それに、他の流派を取り入れたほうが八葉も更なる進化をとげるじゃろう

どうじゃ・・・そういえば名を聞いておらんかったな」
「ハハ・・・
変わった人ですね
その申し出、受けましょう・・・
名はリィンといいます
性はありません」
「よかろう、リィンよ
今から、お主は儂の弟子じゃ」
「ええ、よろしくお願いします
ユン殿」
そして、リィンは八葉の最後の弟子として定められることになるが、それはまだ先の話

２話　別れと旅立ち

リインがユンのところに弟子入りしてから早数年。
リインは１３歳になった。
幼かったリインも背が伸び、顔つきも未だ少年と呼べる顔つきではあるが、徐々に青年へと変わりつつある
「初手、壱ノ型」
「唸れ、螺旋撃」
ユンがリインに言うと、リインは上段に構え、右からの切り下げ、切り下げの姿勢から横に一閃、そして、足を軸に回転を取り入れ、更に横に一閃する
螺旋を描くように、炎の竜巻を発生させる
「次手、弐ノ型」
「疾風」
高速移動からの連続で斬撃を繰り出す
「秘儀・・・」
「なに?」

「裏疾風・焔」
高速移動からの斬撃のあと、焔の衝撃波を繰り出す
「・・・次手、惨ノ型」
ユンはいきなり弐ノ型の派生技、裏疾風、更に独自にアレンジしたのを出したのを見て、目を見開いたが、気を取り直して続ける
「焼き尽くせ」
焔を纏った太刀を上段に構え、そのまま振り下ろす
「次手、肆ノ型」
「紅葉」
リィンは太刀を鞘に納め、そのまますれ違いざまに斬る
「次手、伍ノ型」
「残月」
太刀を鞘に納め、居合の構えを取り、そのまま抜刀する
「次手、陸ノ型」
「緋空斬」
「え」
太刀を横に薙ぎ、焔の斬撃をそのまま一直線に飛ばす

ユンは思わず素の声を出すが、そこは剣仙、直ぐに気を取り直す
「・・・次手、悉ノ型」
「刻葉」
「おい」
「斬」
リィンは分身を出し、疾走し、連続で斬撃を繰り出す、そして連撃後、あたり一帯を一閃する
そして、ユンは直ぐに突っ込みを入れる
「有望株だと思っとたが、中伝いや、まさか皆伝レベルの技を出してくるとはおもわなかったわい」
「いえ、これも老師の教えのおかげです」
「教えとらん、基礎的な八葉の技は教えたが、裏疾風とかは教えとらん」
ユンはリィンの潜在能力を見抜き、八葉の弟子として迎え入れた
だが、リィンの剣武の才はユンの想像以上であった。八葉の型を教えて数年ではあるが、その剣の冴えは剣聖の領域まできている
そして、今は亡きかの剣士に師事してもらっていたと聞いているが、他の流派を修めている者は先に修めた流派の型や癖が付いて、中途半端な複合剣技に最初の方はなりや

すい
だが、リィンは活かせるとこはしっかりと活かし、数年で自身の剣技として、昇華している
末恐ろしい弟子だと思う。だが、同時にこの者なら、最後の弟子として〝八葉の後継〟にしてもいいかもしれないと同時に思う
リィンの暴走を抑え、弟子として迎え入れた時に最後の弟子として〝悉〟を授けようと思ってはいた。
だが、この剣の冴えと成長速度を見て、ユンは再度思うのだった
〝こやつこそが八葉を受け継ぐ最後の弟子〟だと――――
「リィンよ
お主も儂の元から離れるときが来たようじゃ
明日、儂と試合て、一本とってみよ」
「え・・・」
ユンはリィンにそう告げる

そして、次の日、リィンとユンは向かい合うように立っていた
お互いの手には、太刀が握られている

「昨日も言ったが、儂から一本取ってみよ」

「ええ・・・」
リィンとユンはお互いに太刀の柄に手を添え、合図もない
ただ、タイミングを見計らったかのように同時に動き出す
繰り出すのは、神速の居合の一閃
リィンは殺るつもりで、ユンの首めがけて、その刃を降り抜く
だが、ユンも難なくその一撃を自身の太刀で受け止める
「いきなり、殺そうとするやつがおるか」
「その気でいかないと、あなたから一本なんて不可能でしょう」
「フッ、言いよるわ」
防がれたリィンは、刃を引き、距離を取る
リィンは、太刀を鞘に修め、中腰で手を柄に添える
居合の構えだ
「ほう・・・
来るがよい」
そして、ユンの視界からリィンが消える

超高速歩法、縮地からの抜刀にて、リィンは斬りかかる
通常の魔獣や有象無象の輩相手なら、すでに勝負が決していたであろう
だが、相手は剣仙と名高い武人、リィンの高速の抜刀をユンは自身の太刀で受け止める
「う・・・・おぉぉぉぉぉお!!」
リィンは力任せに太刀を押し込む
「む・・・・・」

リィンは、己の膂力に物を言わせ、ユンを押し込んでいく
ユンは多少顔を歪めるが、リィン太刀を受け流す
「あ・・・・」
太刀を受け流されたリィンは、ユンを押し込むのに力を込めていたこともあり、そのまま前のめりに倒れこみそうになる
「終わりじゃな」
ユンは太刀の峰の方でリィンの背中にに打ち込み、この立ち合いを終わらせようとする
だが、リィンは無理やり身体を反転し、ユンの太刀を受け止める

「くっ・・・」
だが、無理やり反転させたのと、態勢が不十分だったこともあり、リインはユンの斬撃を受け止めきれず、そのまま吹き飛ばされる
「ハッ、ハッ・・・
くそ、あの人本当に７０代かよ・・・！」
リインは、７０代にして驚異の身体能力を誇る、剣仙に毒づきながらも、太刀を杖代わりに立ち上がる。
気配でユンがこっちに向かってきていることは察知していた。
ユンの実力で考えて気配を悟らせぬよう向かってくるのは容易だろう。
わざと察知されるように動いてるとリインは考える。
そもそもこれは、生死を分けた殺し合いではない、そこまで本気になることでもないと思ってのことだろう。
先程、リインは本気の居合で殺そうとはしていたが、それはそれだろう
そもそも、実力が違いすぎるので、リインが殺す気で行って丁度いいくらいだ。
「さて、どう迎え撃つか・・・」
迫ってきている気配にリインは考える
相手はかの剣仙だ小手先の技など通用しないのはわかっている

そうなると自身が培ってきた戦闘スキルで対応するしかないとリインは柄に手を添え、歩き出した

「緋空斬・追連」

ユンが、上空を飛びながら移動していると、焔を纏った斬撃が衝撃波として、ユンに向かって襲い掛かる

だが、ユンはそれを軽く斬り払う

「ふむ、もうすでにその領域に至っておるか

リイン」

先のリインの技で、リインの場所を察知したユンはリインの前に降り立つ

「恐るべき、成長速度じゃな

お主が儂を超える日も遠くはないじゃろう

じゃが、今日はこれにて幕じゃ」

「えぇ・・・」

ユンとリインはこの一撃で決めるべく、互いに闘気を練り上げる

「終ノ型・・・雷光」

それは最速の斬撃

人間の動体視力では到底繰り出せないほど研ぎ澄まされた神速の斬撃

「これは・・・！」
ユンは、リインの繰り出した斬撃をみて、驚愕する
おそらくはかの亡き師匠に教わった剣技と自信が教えた八葉を組み合わせ、自己流に昇華させたものだと結論づける。
それでも、剣技としてしっかりと完成されている
初動から一気に最高速度にまで到達し、そして、そこから繰り出される速度と破壊力を伴った、動体視力を凌駕する神速の斬撃
「伍ノ型・・・残月」
ユンは柄を逆手に持ち変え、相手の攻撃タイミングを合わせ抜刀する
言わば、カウンターだ
「がっ・・・」
リインは残月をモロに喰らい、そのまま後方に吹き飛ばされる
意識はあるようだが、続行できる状態ではないだろう
「・・・・・・」
ユンは無言で自身の頬に手を触れる
その手には血が付いていた

「少しでもずれていたらやられていたのは儂のほかもしれんの・・・」

「さて、リィンよ・・・
お主には、八葉一刀流、中伝を授ける
先の立ち合い見事じゃった・・・」
「え・・・?
中伝・・・?」
「なにも一本取れとは言ったが、それが位を授ける条件とは言っておらんからの・・・
それに未だお主は修行中の身じゃ取れるわけがなかろう」
「くっ・・・・」
リィンは悔しそうに顔を歪める
「そして、お主には悉ノ型・無を授ける
その型の持つ意味、お主自身で見出してみるがよい」
「無・・・」
ユンは、リィンに中伝目録と書かれた、巻物を渡す
「リィンよ

この段階でもうお主には奥伝への道筋ができておる
八葉の剣士は、儂の元を離れた時点で奥伝の資格ができておる
そして、その剣が奥伝へと至るにふさわしいと判断した時に奥義伝承の試しを行う最後の壁としてお主の前に姿を現すであろう
八葉の高み〝剣聖〟へ至ってみよ
我が不詳の弟子、リィンよ」
「はい・・・！」
「じゃから、一旦は別れじゃリィン
達者での」
ユンはそう言うと、リィンに背中を向け歩き出す
独り立ちさせるにはリィンは未だ幼い年齢。
だが、八葉のしきたりに例外はない、最初の試しを終えた時点で、弟子の元を去り、そこから先の伸ばし方は弟子に任せる。
それはリィンとて例外ではない。
それにリィンには剣技のほかにサバイバル術等も仕込んでいる。
生き延びれるであろう
そして、再び相まみえた時は〝剣聖〟の名と〝後継〟を授けよう

そんな思惑があるとは知らず、リィンは師の背中を見えなくなるまで見守っていた
そして、師の背中が見えなくなると、リィンも歩き出す
今はどこに向かうかは考えてはいない
それでも、亡き師と八葉の師の教えを胸に今は進む、それだけだ

4話　邂逅

八葉の師、ユン・カーファイがリィンの元を去って、2年
リィンは15歳になった。
ユンがリィンの元を去ってから、リィンは各地を旅をした。
リベールでは、かの剣聖に、クロスベルでは風の剣聖に・・・そして、不本意なことに共和国では、姉弟子を名乗る女剣士に追い掛け回されたこともあった
リベールもクロスベルもリィンに意志であったし、兄弟子に剣を見てもらえたことは何よりの経験となった。
だが、共和国の女剣士に関しては自身の意思ではなかったと言っておこう。
共和国には元々観光的なつもりで訪れたつもりだった。
そして、妙な気配を感じたため、共和国にあるとある森林を訪れた時のことだった・・・

1年前・共和国

「これは・・・」
森林自体は至ってどこにでもあるような所だ
だが、違うのはその濃密な気配、人の気配でもない、魔獣どもの気配でもない
明確な〝なにか〟を感じるが、それがなにかまではわからない
「さて、いつまで隠れてるつもりだ
かくれんぼがしたいわけじゃないだろ」
リィンは、太刀を鞘から少し出しながら、こちらを見ているであろう〝誰か〟に向けて言う
「ふむ、気配は消していたつもりだったが・・・」
「生憎、敏感肌なもんでね」
そこに現れたのは、奇妙なお面で顔を隠し、忍びのような装束を身にまっとた者だった
声からして男性だろう
おそらくだが、成人もしていることだろう
「警告しよう、今すぐここから立ち去れば怪我無く済もう
だが、拒めば命の保証はせん」
「悪いな、そこまで教養良く育ったわけじゃないんでね・・・

素直には、聞けないな」
「残念だ
なら、その命もらい受ける」
そう言うと、忍び装束は投擲する
それは、巨大な手裏剣だった
暗器とかで使われる小型の手裏剣ではない、大型の手裏剣だ
リィンは、それを軽く弾く。
弾かれた手裏剣はどこか飛んでいくのではなく、旋回して再びリィンに襲い掛かる。
「こいつは・・・」
リィンは、今度は弾かず、そのまま太刀で手裏剣を受け止める
受け止められた手裏剣は忍び装束の手に引き戻された
「なるほどな
鋼線か・・・」
先の攻防で、リィンはあの手裏剣の動きの正体に当たりを付ける
「・・・・・・・」
忍び装束は無言だ
「図星・・・ってことでいいんかねぇ・・・」

顔は覆われているし、言葉も発しない忍び装束なのでリィンの先の考えがあってるかわからない
まぁ、生死を分けた殺し合いで、相手の戦術等を理解して挑む方が珍しい
分からないことのほうが多いのだから・・・
「まぁ、やってみればわかるか・・・」
そう言うとリィンは、忍び装束に向かって真っすぐ走り出す。
忍び装束はリィンに向かって手裏剣を投げる
だが、リィンは身体を反らし、それをかわす
忍び装束の攻撃はまだ終わってない、忍び装束が手元を動かすと先程リィンがかわした手裏剣が引き戻されるようにものすごい速度でリィンに襲い掛かる
リィンが忍び装束の元にたどり着くより、手裏剣の方が早い。
――やはり、鋼線かなにかで操ってるか・・・
リィンは先の手裏剣の動きの正体が間違ってなかったと確信する。
リィンは横目で手裏剣の位置を確認しながら忍び装束の元へ走っていく。
手裏剣はどんどんリィンとの距離をつめ、回転しながら迫っていく
手裏剣がリィンに当たる瞬間、リィンの姿が消える
「なっ・・・!?」

顔が覆われているせいでどんな顔をしているかわからないが、声からして驚愕していることだろう

「――――驚くのは結構だが・・・

がら空きだ」

忍び装束が気づいた時にはリィンはもう忍び装束の目の前にいた

急いで、手裏剣を引き戻し、防ごうとするが、もう遅い

リィンの太刀は十字を描き、忍び装束を斬り裂く

「がっ・・・」

忍び装束は、鮮血を散らしながら、斬られた衝撃で後退する

「・・・さて、別に詳しい話を聞きたくて戦ったわけじゃないし

まぁ、いいんだが、けどオレの質問には答えてもらおうか・・・

武器も違うし、手裏剣術があるなんて聞いたことなかったが、その歩法に流れ、〝八葉〟だな?

勝ったし、これくらいは答えてもらおうか?」

「・・・八葉の流れを汲んでいるのは確かだ

だが、我らが修めているのは黒神一刀流」

「黒神・・・」
「それに、〝我ら〟は負けてはおらん」
忍び装束が言うと、茂みの中から様子を見てたのであろう
同じような格好の連中が一斉に姿を見せ、リィンに向かって大型手裏剣を投げる
おそらくは先の忍び装束と同じく、手裏剣に鋼線をくくり付けて、操ることは可能だろう
「悪いな、もう〝見切った〟」
「斬」
リィンは太刀を片手に辺り一帯を一閃し、すべての手裏剣を弾き落とす。
「馬鹿な・・・」
それを見た、忍び装束の一人は呟いた
「さて、色々喋ってもら・・・・!?」
リィンは咄嗟に気配を察知し、後方に飛ぶ
そこに〝なにかが〟駆け抜けた
「へぇ、完全な不意打ちのはずだったんだけど・・・
これもかわすと来たか・・・
流石は〝八葉の後継〟と言ったところかな

〝弟弟子くん〟」
それは、白銀だった
白銀の長髪に、黒の戦闘装束、そして、大太刀を構えた、女剣士がそこにはいた。
「・・・白銀の剣士
それにその大太刀に八葉の名を語ると言うことは
全くの無関係ということではないみたいだな・・・」
「まぁ、そうだね
八葉とは少なからず縁があるとだけ答えておくよ
それにしても、君、想像以上だね
クロガネに手傷を加え、その他の忍の一斉攻撃も弾き飛ばし、私の気配を察知し、かわす・・・か
これは、先が楽しみだ」
「・・・・・・」
リィンは、女剣士を見据える
明らかに、先の忍び連中より〝格上〟
そんなに消耗はしていないが、どうするかと思案していると・・・
「〝姫〟、何故ここに・・・」

「やぁ、クロガネ、派手にやられたね。
なに、感じたことのない気配があったものでね、見に来たんだ。
まさかそれが〝弟弟子〟だとはね。
本当、驚いたよ」
リィンが先程、斬った忍びはクロガネと言うらしい
「さて・・・と
〝弟弟子くん〟今は君と事を構える気はない。
先程、クロガネの忠告通り、今回は引いてくれないかな?」
「この漂っている、妙な気配を見逃せと?」
「フフ、まぁそうだね
この濃密な気配・・・見逃せと言うのは酷だというのはこちらも承知さ・・・
だけど・・・引いてくれないと〝こちらも〟君を殺すしかなくなる〟」
「・・・・どうやら、尋常ではない事情ある模様
今回は引きましょう・・・
それに、この森、〝なにか〟があるのは間違いないようだが、その謎を解き明かすのはオレの役目じゃなさそうだ」
「フフ、助かるよ

しばらくは共和国にいるんだろう？
縁があれば、また会おう」
「ええ
機会があればまた」
リィンは、太刀を鞘に納め、踵を返し、森から立ち去るのだった
「どうやら、姫の殺気が効いたようですね」
「いや、私の殺気に怯えたとかじゃない
〝弟弟子〟の実力なら、多分どうにかできたことだろう・・・
けど、それをしなかったのは本当に私たちの想いを汲み取ってくれたってことだろう・・・
やれやれ、本当末恐ろしいのを〝最後の弟子〟にしたね、老師は・・・」
〝姫〟と呼ばれた女剣士は先程のリィンの様子を思い出しながら言う
「けど、喰えない〝兄弟子達〟と違って、可愛げがあるじゃないか
明日にでも、顔を出しに行こうかな」
「姫・・・」
「さて、皆、クロガネの怪我の手当てをしてやってくれ
手当てが済んだら、戻ろうか」

〝姫〟の言葉に皆動き出す
そして、ここからはリィンと〝姫〟による地獄の攻防の始まりだった・・・
次の日から〝姫〟は忍び達に言った通り、本当にリィンの元に顔を出しに行ったのだった・・・

共和国・龍來

森を出たリィンは〝龍來〟で食事を取っていたところ・・・
「やあ、弟弟子くん
龍來は観光名所としても絶景だし、食べ物もうまいだろう」
「ぶっ・・・!!」
昨夜、明確な敵対関係と言うわけではなかったが、刃を交えたのは確かだ
その昨日の今日で普通に話しかけてきた〝彼女〟に驚き、リィンはむせる
「あ、貴女は昨日の・・・
〝姫〟と呼ばれていた・・・」
「あぁ、そう言えば、名前、名乗らなかったね
シズナ・レム・ミスルギだ

よろしく頼むよ、〝リィン〟」
〝シズナ〟と名乗った女剣士は、リィンの前に手を差し出す
「なんですか、これ」
「お近づきの証の握手さ」
「いや、お近づきって・・・
昨日、貴女の部下と殺しあったばかりなんですけど・・・」
「まあ、そうなんけど
昨日の敵は何とやらだ」
「はぁ・・・
名前を知ってることといい、色々聞きたいことはありますけど・・・
まあ、よろしくお願いいたします。
〝シズナさん〟」
これ以降、リィンは彼女に追い掛け回されることになる
少なくともリィンが共和国に滞在している間は・・・
そして、この邂逅がこの先のリィンの道に影響を及ぼすことになるのだが、それはまだまだ先の話だ

5話　帝国へ

共和国・首都イーディス・電車ホーム
「やあ、リイン
行くんだね」
「ええ、共和国には元々観光目的でしたし
〝黒神一刀流〟に〝斑鳩〟の存在も認知しておりませんでしたから
それに〝裏弟子〟の存在も・・・
ここまで長居するつもりはなかったので・・・」
「まあ、老師は言わないだろうねぇ・・・
君は老師が定めた〝最後の弟子〟闇の剣である流派の存在は今は伏せておきたかったんだろうね
君が奥伝へ至り、〝八葉の後継〟になるその時までは・・・ね」
「最後の弟子・・・」
「今は深く考えなくていいさ・・・
そのうちこれは知ることになる

だから君は、八葉の剣を磨くことだけ考えてればいいさ
なに君と私の因果は始まったばかり
いずれまた・・・ってなんて顔してるんだい」
リィンは心底嫌そうな顔をする
共和国に滞在してた期間は長くはなかったが、あの森で出会ってからこれでもかってくらいにリィンは追いかけられたので、離れれると安心したとたんに因果で繋がったとかまた、会うことになるようなニュアンスのことを言われればリィンも嫌な顔をするだろう。
「いえ、できれば貴女とは再会したくないと思いまして」
「本当、そういうところは可愛げないよねぇ・・・」
シズナはリィンの毒舌に気にした様子はなく、笑っている。
「ところでこれからどこに向かうんだい？」
「一応、帝国の方に向かおうかと思ってます」
「帝国ってあのエレボニア帝国かい？」
「ええ、そのつもりですけど」
「そうか・・・
帝国は今、ピりついているから気を付けた方がいい」

「ええ、心得ておきます」
「ああ、それとリィン
君、斑鳩に入団しないかい？」
「は？」
リィンはシズナの提案に何言ってるんだと言った表情をする
「何、悪いことじゃないと思うんだよ
共和国一と言っていい猟兵団の後ろ盾があるのは結構動きやすいと思うよ？」
「動きずらいでしょ・・・」
猟兵団は、好意的に受け入れてくれるところは多くはない
リベールではそもそも猟兵の運用に厳しいし、クロスベルはいまいちわからないがリベール程厳しくなかった印象ではある
帝国も裏で猟兵を政府が雇っているという噂もある
ん？、割と動きやすいとリィンは各地の情勢を思い出しながら言う
「ね？、ね？、悪くないでしょ？」
「ハハ、考えておきますよ」
リィンは問題を先送りすることにした
まだ齢１４、将来のことを考えるには若いと結論付ける

「フフ、振られちゃったかー
まぁ、明確に断られたわけじゃないしね
また、会おうリィン
次に会う時までにせいぜい老師より賜った〝無ノ型〟研ぎ澄ませておくといい」
「ええ、シズナ姉弟子も息災で・・・」
そして、帝国行きの列車の汽笛が鳴った
出発時刻の合図だ
リィンはそれを聞いて、列車に乗り込む
そして、列車は帝国に向けて発車するのだった・・・
「クロガネ
例の件、どうなってる?」
「はい、〝受ける方向で進んでいます〟」
「そうか、そうか
どうやら、〝弟弟子〟との再会・・・
すぐに会えそうだね」
「〝姫〟・・・
どうやら、あの少年が気に入ったようですね」

「フフ、そうだね
あの潜在能力まだ伸びそうだし
〝本気〟も見れてないしね・・・
次の仕合でそれをみれるといいな」
シズナは例の森で忍衆とリインの戦闘を思い出しながら言う
「〝姫〟
あまりやりすぎないように・・・
あの少年はあの御仁の・・・」
「わかってるよ
それに私自身が気に入ったんだ
〝後継〟とだけではなく〝リイン〟という人を気に入ったのさ」
「そうですか・・・」
クロガネは内心リインに合掌する
クロガネもリインのことは評価している、あの森での圧倒的戦闘能力
シズナの不意打ちですらかわし切り、無傷で〝斑鳩〟の忍衆を戦闘不能まで追い込んだ
もしあれが生死を分けた殺し合いだったとすると、ゾッとしない話だ

シズナのリインに対しての熱の入れ様から察するに相当気に入ったようだ・・・
―まあ、あの少年を〝斑鳩〟に入団させれなくとも、縁を繋いでおくのは悪い話じゃない
あの少年と敵対すると考えられると犠牲者がでるのは前提で事を運ばなければならない
少年には気の毒だと思うが〝姫〟には頑張って少年との縁を繋ぎ続けてほしい―
「な、なんだ
急に寒気が・・・」
リインは急な悪寒に身体を震わせるのだった・・・